



虎 とら

一

むかし、支那しなの山西省さんせいしやうに西関さいかんという小さな町がありました。その町の近くのある村に陳ちんという、年のわかい、正直しょうじきものの木こりがいました。村の後ろには、むかしから虎とらがいると言われている大きな山がそびえていました。陳は、まいにち朝早くからその山へは行ってはたき

支那：
現在の「中国」の
こと

木を切りあつめ、それを町で売って、ふた親をやしなっていました。

年をとったふた親は、いつも陳に向か^むつて、あまり山ぶかくはいらないように、虎にでも出あつたら命^{いのち}はないぞと、口ぐせのようにいいきかせていました。

ところがある年の春のこと、陳はうっかり山おくへ入りこんで、道にまよつてしまいました。ふもとの方へひきかえすつもりで、どんどん急^{いそ}ぐのですが、方角をまちがえたものか、いつてもいつても竹やぶのつづきで、いつまでたつても、もとの道へは出て来られません。まだ、朝のうちなのですが、しげつたやぶの中はきみがわるいほど暗くて、しいんとしずまりかえています。ときどき、ほととぎすがひきさくような鳴き声をたてて、空をひくくかすめてとお

るほかには何の物音ものもしません。

陳は、あせりあせり歩きまわっているうちに、ふと足をふみはずして、すくと、大きな深いあなのそこへおちこみました。うんよく、どこにもけがをしませんでしたが、こまったことにはあなのぐるりは、切り立ったような岩かべで、いくらもがいても足のかげようもありません。上には竹の葉が暗くおおいかぶさっています。

陳は、しまったなあと青くなって、ぼんやりと立ちつくしていました。あなはずっとおくがふかいらしく、向こうの方はまっくらです。その、くらいあなのおくを見さぐりますと、ふと左手の間ぢかいところに、大きな目のようなものが四つぎらぎら光っているのが見えました。

間ぢかい…
すぐ近い

何だろうとおもって、どきつとしましたが、間もなく、じぶんの目がくらがりになれてきますと、そこには二ひきの小さな虎の子がいるではありませんか。生まれてから、間もないのだろうとおもわれるような、小さな虎の子です。

陳はうわつと心でさけんでふるえ上がりました。

そのとき、ふと見ますと、右横の岩かべには少しばかり、こうばいがついています。虎はそこから出はいりするものと見えました。陳は、そこから上り出ようと、もがきもがきしましたが、つるつるすべって、とても上げません。

どうにも仕方がないので、しまいにはたおれくずれるようにすわりこんで、ふうふういきをついていました。

虎の子は陳がちつとも手出しをしないのですっかり安心したように、そこら

をのそのそはいまわったり、犬の子のように、もつれ合ったりしてあそんでいきます。

陳は、いまに親虎とらが二ひきでかえって来たら、じぶんはいきなり食いころされるのだとおもうと、気が気ではありません。陳はじぶんのなくなったあとの、年をとったふた親のことを考えたりして、めそめそなきだしました。

そのうちに日もだんだんかげってきたとみえて、あなのそこへも、つめたい風がふき下りて来ました。

と、ふいにあなの上の方で、ウオー、ウオーとよびかけるような、虎の声がありました。二ひきの子虎とらはそれをきくと、うれしそうにのび上って、オー、オーと、へんじをしました。それと一しよに、おそろしい大きな一ひきの虎が、

しかを口にくわえて、れいの、こうばいのある岩かべからとび下りて来ました。虎は陳を見て、口からしかをおとし、ウウウとつめをたてて、とびかかろうとしました。陳は、あつと言ってその場にうつぶしました。「もうだめだ。」とおもって、小さくなっていました。どうしたのか、虎は一こうかみつきにも来ません。陳はかなりながい間うつぶして、ちぢこまっていました。

あんまりふしぎなので、そつと顔を上げて見ますと、虎はあなの向こうの方で、しかを小さく食いちぎっては、子虎たちに食べさせています。

陳は、ほつとしました。でも今はあんなたべものがあるので、わしをねらいもしないのだろうが、あしたになって、子虎のおなががすいたら、きつと、わしを、あのしかのようにかみちぎって食わすにちがない、こう思うと、とて

もこわくなって、じつとしてはいられないような気がしました。

子虎は、おなかがくちくちくになったと見えて、もう、食べものには見向きもせず、二人で親虎へじゃれかかりました。親虎は子虎の耳のうしろや、鼻の上をなめなめして、うれしそうにしていました。そのうちに子虎は親虎からはなれて、二人でごろごろばしごっこをし出しました。

そのひまに親虎は、食べあましたしかの肉を口にくわえてのそのそと陳のそばへ来て、

「さあ、おまえもお上がり。」といわないばかりに、それを目のまえにおいて、また子虎の方へいきました。

やがて親虎はころりと横にねそべりました。二ひきの子虎はそのはらのわき

へもぐりこんでねむりはじめました。親虎も、うとうととねむりかけたようです。

陳はそれを見て、すっかり気がゆるむと一しよに、ひどくおなかですいてたまらなくなりました。それで虎のくれたしかの肉を、なまのまままで、がつがつ食べました。

もうあなの中は夜です。おなかが一ぱいになったので、少し元気もつきましたが、しかしあすの朝になったら、きつと食いころされるのだとおもうと、なきくるいたいような気になりました。

二

陳は、^{ちん}それでも、いつの間にかつかれてねむったものと見えます。ふと目を

あけてみますと、もう夜があけたらしく、あなの中には、うつすらと、白いあかりがさしていました。

こわごわ見さぐりますと、親虎とらは、もうあなから出たものと見えて、すがたが見えません。子虎二ひきだけがウウウ、ウウウとさびしそうにないてうづくまっています。

「おお、よかった。」

陳は、親虎がかえって来るまでは命いのちがあるので、こう思いました。じつとすわって子虎が二人であそぶのを見ているうちに、やがて、もう昼じぶんだろうとおもうころ、れいのように、ウオーウオーとうなって親虎がかえって来ました。きょうは、ゆうべのより、ずっと小さな子じかをくわえて来ました。

そして、さつそく子虎にちぎってたべさせ、のこりを、また陳のところへもつて来てくれました。

陳は、このあんばいでは、殺されないですむかなとおもいました。しかし、命はあっても、あなから出られないのでは生きているかいもありません。

陳はそのまま十日も十五日も虎にやしなってもらって、あなの中でくらししました。親虎のいないときには、どうかして岩をはい上がろうと、しきりにもがきもがきしましたが、とてもだめでした。

そのかわり子虎とは、それこそ大のなかよしになりました。陳は子虎と一しよにかたまつて、昼ねをもしました。

親虎は、ときどき、足先にけがをしたり、からだにすりきずをしてかえって

来ることがありました。陳はそんなときには、すぐに着物のすそをちぎって、足をしばってやったり、背中のきずへつばをなすりなすりして、かいほうしたりしました。

やがて二十日ばかりもたちました。子虎はまいにち目に見えてふとつていて、はっかもう今では、かなり大きくなりました。

ある朝のことです。親虎はおきると一しよに子虎を背中へせなかのせてとび出そうとしました。もうすっかり大きくなったので、外へつれて出て、えものをとることをおしえようというのでしよう。陳はおどろいて、親虎の足にとりすぎりました。じぶん一人をおいて、とおくへいつてしまわれでもしたら、そのままうえ死にをしなければなりません。陳はなき声を出して、

「どうぞわたしも外へ出して下さい。あなたに見はなされては、わたしは死ぬよりほかはありません。どうぞ、おたすけ下さい。つれ出して下さい。」と、人間にいうように、一生けんめいにたのみました。

親虎は、よしよし分かったというような顔つきをして、二人の子虎を背せなか中へかじりつかせたまま、岩かべをとび上がりました。陳は、どうなることかとまっていますと、親虎は間もなく、またかえつて来て、陳のまえに前足をそろえて、からだをこせなかごめ、さあ、背せなか中につかまれというように、くびを下げました。

陳がその背せなか中へ乗って、くびのところにつかまりますと、虎は一気にあなの上へかけ上がりました。

虎は陳をあなのそばへおろすと、子虎二人をつれて、のこのこと歩き出し

ます。陳はあわてて、

「ああ、まって下さい。わたしは、ここへおきざりにされては、道がわかりません。まよいまよいしていれば、ほかの虎に食いころされてしまいます。わたしの家は西関さいかんのそばです。どうか、西関の町へおりる道までおつれ下さい。おねがいです。」と、地びたに手をついてたのみました。虎は、

「はあ、そうか。」というようにうなずいて、反対の方向へ歩き出しました。二人の子虎がちよこちよこことついてあるきます。陳はそのあとからいきました。

そのうちに、見おぼえのある分かれ道のところへ来ました。陳は、うれしさのあまりに、ぼろぼろとなみだをながしながら、

「おお、虎さん、ありがとうございます。」と、かけよって、親虎のくびにしがみついてなき入りました。

「ほんとに、わたしには、このごおんがえしが出来そうもありません。ほんのお礼のおしるしですが、あさつてのばん、ええと、もう満月まんげつのはずです。月が上ると一しよに、あなを出て西関の町の門の近くまで来て下さい。門の手まえに、大きなやなぎが三本はえていて、下にいずみがわき出ているところがあります。

そこは、いつも旅の人が休む、休み場所です。日ははいればだれもおりません。そこまでお出で下されば、わたしは、ぶたを二ひき料理りょうりをしまつています。それを食べていって下さい。きっとですよ。」

陳はこう言ってから、二人の子虎のところへいき、

「ありがとうございます。じょうぶに大きくなって下さい。さようなら、さようなら。」と言って頭をなでました。

三

死んだものとおもっていた陳が、ひよこりとかえって来たのを見たときの、年をとったふた親のおどろきと、よろこびとを想像そうぞうして下さい。村中の人々も、陳が虎とらにたすけられた話をきくと、それはそれはありがとうございました。

陳は三日目には、朝早くからぶたの料理りょうりをしました。一ぴきのぶたは丸やきにし、一ぴきはいくつにも切って、大なべで何度もかかって、すっかりしおゆでにしました。

ところが、親虎は、何をまちがえたのか、まだ日のあるうちに、のこのこと山を下りて来ました。そして、陳が言っただいずみのところをとおりこして、町の門をくぐって、のっそ、のっそと大通りへは行っていきました。

町中の人たちは、うわあつとびっくりして、四方八方へにげちりました。すると、一人よくのふかいやつがいて、この虎をいけどってお役所へつき出せば、

町中のものをたすけたというので、うんとほうびがもらえるにちがいない、そうだと言って、近所のたくましいわかものたちをかりあつめ、やりや、石をは

おおゆみ

じく大弓や、火なわ鉄っぽうをもって、虎をふくろろじへおいこませました。

ふくろろじ…
いちどまり

虎はおこつてあばれくるいました。しかしちよつとしたすきまに、わきばらへやりをつきさされて、よこだおしにたおれました。そこへおおぜいがとび

四方八方…
あちらこちら

かかって、足をなわでしぼり上げ、ふとなわをつけて、よいしょよいしょと、役人のところへひきずっていきました。

陳は、もう間もなく日もはいるので、料理したぶたを、村の人たち五、六人と一しょにひっかっいで、いずみのそばへ出て来ました。と町の門から出て来た人たちが、虎の話をしてわらいわらいいきます。陳は、わけをきくとびっくりして、ころがるようにかけとんで、役人のところへいきました。

いって見ると、虎は鉄のくさりでもって役所の大門の柱にしぼりつけられており、町のものや役所の人たちが、大ぜいでとりまいてわいわいからかい、さわいでいます。

陳は役人のまえにひざをついて、

「この虎は、わたしの命いのちをすくってくれた大恩人おんじんでございます。どうか、このまま、わたしにおさげわたし下さいますように。」と、なみだごえでねがいこみました。

虎をつかまえた仲間なかまの一人が、

「はっはあ、何をいやがるんだい。このばかめ。だれが、この虎をとつちめたと思うんだい。」と言いさま、ぽかんと陳を足げにしました。

「まで。」と役人の一人は、陳にわけを話させました。

「ふうん、ほんとうか、それは。」

「うそではございません。そのしょうこには、わたくしに、あのくさをほどこせてくださいまし。虎はわたくしには、かみつきはいたしません。」と陳は

言いました。役人は、

「これはおもしろい。しかし、くさりをほどけば、あとがあぶない。それでは虎の口の下へ行って立っていてみよ。」と言いました。

陳は虎のあごの下にかけよって、

「ああ、もうしわけもありません。あなたが、ひなか日中に町の中へなかは行って来られたから、こんなことになったのです。いずみのところへいきましよう。おやいや、おなかから血がでているな。ああ、すまんことをしました。お役人さま、どうかこの虎を山へかえしてやって下さい。わたくしが、ちゃんとつれていきます。」

ちん陳はこう言い言い、おんおんなきました。みんなはびっくりして声もたてず、

陳と虎と役人の顔を見さぐりました。虎は陳のかたに顔をのせて、かなしそうに、ふうふういきをしています。

「よし、つれていけ。」と役人は言いました。陳は、なみだをふきふきくさりをといて、虎につきそうて、いずみのところへつれていきました。町中の人々は、話をつたえきいて、なみだぐんで一人を見おくりました。

いずみのそばで、陳たちは、虎にごちそうを食べさせました。虎はしおむしの方だけ食べて、もう一つの丸やきぶたは子虎のおみやげにするらしく、そのまま口にくわえて、かえりかけます。陳は、

「どうか、また来て下さい。こんどはわたしの家へ来て下さい。どうぞね。では、さようなら。きつとまた来て下さいよ。」と、なごりをおしみました。

虎は、ありがとうありがとうというようにうなずいて、山へかえっていきま
した。陳は、ほろりほろりとなみだをこぼしながら、いつまでもあとを見お
く
って立っていました。虎のすがたが林のかげになつて見えなくなつたとおも
い
ますと、大きな月が、ふんわりと陳たちのうしろにのぼりました。

